

三陸の大津波を生き抜いた神楽の物語

# 廻り<sup>かぐら</sup>神楽



2017年/日本/94分/DCP・Blu-ray

出演：黒森神楽保存会

監督・プロデューサー：遠藤 協

監督：大澤未来

製作：ヴィジュアルフォークロア

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

支援：一般社団法人 全日本テレビ番組製作社連盟

機材協力：（株）小輝日文

◆2017年12月16日(土)～ 盛岡ルミエール

◆2018年1月20(土)～ 東京・ポレポレ東中野にて劇場公開！

■ 岩手県内にて「廻り映画」プロジェクト展開中！！

2017年11月12日(日) 大槌マストホール

2017年11月26日(日) 久慈アンバーホール ほか続々上映

## ■ 岩手県内、全国からのご支援で映画が完成

映画『廻り神楽』は、岩手県内はもとより、全国各地からいただいたご支援によって完成しました。2016年12月から17年5月までの約6ヶ月間で、のべ300名の方から総額311万5000円にのぼるご協賛をいただきました。

協賛者からは、郷土の伝統文化を伝え残してほしいという声、被災地への応援など、たくさんの声援が寄せられました。のべ300名の協賛者のお名前は、映画のエンドロールに記載し、感謝のしるしとしました（記載を希望されない方を除く）。

また、協賛募集にあたっては「NPO みやこラボ」や「みやこ映画生協」の呼びかけにより、チラシ配布やポスター掲示などで多数の市民のご協力をいただきました。市民ひとりひとりのご支援・ご声援なくしては完成しませんでした。



## ■ 神楽への願いを通して見る震災から6年後の沿岸

映画では、黒森神楽の2017年春の南廻り巡行を密着取材。黒森神楽の拠点である宮古市をかわきりに、山田町、大槌町、釜石市の各地の人々の営みを、共同監督の大澤未来と遠藤協、明石太郎カメラマンが何十回と往復しながら撮影しました。

震災から6年を経てもなお、困難とはげしい変貌が続く沿岸の《現在》を、神楽に寄せる人々の切なる願いを通して、ドキュメントしました。

## ■ みやこ映画生協とのコラボにより沿岸巡回上映を実施！

黒森神楽のお膝元、岩手県宮古市にある旧シネマリーンにて8月18日（金）から、世界初の一般公開を開始。震災後、仮設住宅等での巡回上映を精力的に行ってきた「みやこ映画生協」との全面共催です。昨年、常設館としては惜しまれつつ閉館した「シネマリーン」の上映設備を活かしながら、沿岸に映画の灯を点しつつづけるための活動の一端にしたいと思います。

今後は黒森神楽の巡行各地で巡回上映（“廻り映画”）を開始します。神楽幕1枚あればどこでもできる黒森神楽と同じように、1枚のスクリーンに映画を映し出す出張上映活動を、北は久慈、南は釜石に至る沿岸各地で展開する予定です。

## ■ 映画のあらすじ

親潮と黒潮が交わる豊かな三陸の海辺を巡りつづけてきた黒森神楽。  
大漁や海上安全を願い、神楽を篤く信仰してきた漁師たち。  
しかし千年に一度と言われる大津波が沿岸を襲う。自然の強大な力により海辺の人々は深い傷を負う。

間一髪のところでは津波を逃れた神楽衆が、以前と同じように海辺を巡りはじめる。  
神々や精霊が息づく三陸を、神の使いとなって巡る神楽衆。死者を鎮魂し、生者を元気づける音色が沿岸に響く。  
なぜ人々はこの地に住まいつづけるのか。大災害を前に神楽はなにができるのか。

いまだ津波の余波に揺れ続ける沿岸を、いく度もの津波を生き抜いてきた神楽が廻る。その通い路に、津波のあとの「海の遠野物語」が紡がれる。



## ■ 黒森神楽と映画の舞台「三陸」

国指定重要無形民俗文化財の「黒森神楽」は、岩手県宮古市の黒森山を拠点に、毎年春になると権現様（獅子頭）のお供をして岩手県の沿岸を巡る「廻り神楽」。340年以上も、三陸の沿岸南北150kmにおよぶ地域を巡り続けてきたとされる。黒森神社には約700年前の南北朝時代初期の権現様が伝わり、歴史のさらなる古さを物語る。

海とともに生きる三陸の人々は、日々の生活や人生の節目の祈りを神楽に託してきた。海の安全、大漁祈願、家の安寧、子や孫の健やかな成長、新造船や新宅祝い…。黒森神楽は、ゆりかごから墓場まで人生のあらゆる節目に対応して舞い祈り、亡き人には神楽念仏を捧げる。これほど海辺の人々の人生に寄り添ってきた神楽は他にない。

東日本大震災から6年を経てもなお、はげしい変貌と困難が続く現在、人々を元気づけ、死者の魂を慰める黒森神楽の果たす役割は、ますます大きくなっている。

# 映画『廻り神楽』の舞台



## 宮古市 田老・摂待

神楽衆代表の松本文雄さん（左） 辛くも津波を免れた。  
神楽衆の畠山俊良さん（右） 震災発生当時海の上にいた。



## 宮古市 石浜

石浜の神楽宿 畠山家。津波で亡くなった母のために弔いの神楽念仏をあげてもらう。



## 山田町 山之内

山之内の神楽宿 山崎家。養殖の施設を流されたが  
変わる事なく神楽を受け入れている。

## 大槌町 浪板

神楽衆の平野智さん（左） 自ら神楽宿をはじめる。  
母のセツ子さん（右） 仮設商店街で居酒屋を営む。



## 大槌町 吉里吉里

神楽衆の田中大喜さん（左） 被災した実家のために門打ちを行う。  
土手一広さん（右） 津波後に購入した中古船の船祝いをしてもらう。



## 釜石市 根浜



旅館宝来館の女将 岩崎昭子さん。  
高台移転した地区の村開きに神楽を招く。



## 用語集

### 【黒森神楽】

黒森神楽は、宮古市山口に鎮座する黒森神社を本拠地としている。正月になると、黒森神社の神霊を移した「権現様」（獅子頭）を携えて、陸中沿岸の集落を回り、家々の庭先で権現舞を舞って悪魔払いや火伏せの祈禱を行う。夜は宿となった民家の座敷に神楽幕を張り夜神楽を演じて、五穀豊穡・大漁成就や天下泰平などの祈禱の舞によって人々を楽しませ祝福をもたらしている。これを神楽衆は修行にも通じることから「巡行」と称し、神楽が訪れる地域の人々は権現様と神楽一行を親しみと尊敬の意味を込めて「黒森様」と呼んでいる。

この巡行は旧盛岡藩の沿岸部を、山口から久慈市まで北上する「北廻り」と釜石市までを南下する「南廻り」に隔年で廻村し、近世初期からその範囲は変わっていない。こうした広範囲で長期にわたる巡行を行う黒森神楽は、全国的にも類例がなく、貴重な習俗が継続されていることから、平成18年3月に国の重要無形民俗文化財に指定された。



### 【黒森神社と権現様】

標高330メートル余りの黒森山は、宮古市街地の北側に位置し、その中腹に南面して黒森神社がある。かつて黒森山は、その名が示すように一山が巨木に覆われ鬱蒼として昼なお暗い山であったという。山頂に大きな杉があり、宮古湾を航海する漁業者などの目印であった。

黒森山麓の発掘調査（平成9年）では、奈良時代（8世紀）のものとされる密教法具が出土し、古代から地域信仰の拠点であったことが窺われる。近世（江戸時代）までは、黒森神社は「黒森観音」とか「黒森権現社」などと呼ばれる神仏習合の霊山であった。建武元年（1334）の鉄鉢（県指定）をはじめ、応安3年（1370）からの棟札が現存し、建久元年（1190）の棟札があったと盛岡藩の記録にも残っている。権現様（獅子頭）は、南北朝初期と推定される無銘のもの、文明17年（1485）から昭和16年まで20頭が「御隠居様」として保存されている。黒森神楽の期限や巡行の始まりは不明であるが、延宝6年（1678）には現在と同様の巡行をしていたことが、藩の記録及び地元の古文書で確認できる。



### 【山の神舞】

黒森神楽にとって最も大切な祈禱の舞であり必ず演じられる。山仕事や農耕を守護する神であると同時に、山が船の航海や漁場の目当て（あて山）になることから漁業者からの信仰も深い。赤い面の山の神が、腰に太刀、背に山の神弊を差し、指に手ちがい（御弊）をつけて現れる。12人の子を持ったという山の神の本地が語られた後、直面で激しい跳躍と回転の舞がある。

力強く畏怖さえ感じさせる舞であるが、黒森神楽の山の神は当地方の古い伝承のとおり女神で、赤い面はお産で息んでいるからだとか、黒い背負い帯が子供をおぶっているのを表していると言われ、安産の神として女性からの信仰も篤い。

上記解説は『黒森神楽神人和楽2016』パンフレットより転載しました。

## ■ 映画制作の経緯

共同監督の大澤未来と遠藤協は、2012年に開始した岩手県宮古市の「震災の記憶伝承事業」に参加。未来につなげる市民の活動を記録しました。その過程で出会ったのが黒森神楽。伝統を実直に守りつつ、震災後の人々の心の振れ幅に対応しながら巡行を続ける姿に感銘を受け、映画化を決意しました。2016年春に企画がスタート、同年9月クランクイン。2017年3月クランクアップ。南北150キロに及ぶ黒森神楽の巡行地を何十回と往復しながらの撮影行となりました。

## ■ 監督からのメッセージ

「なぜ神楽を続けるのか？」との私の問いに、ある若い神楽衆が「神ごとだからやんなきゃない（やらなければならない）」と答えました。理由などない。使命や責任や大義のためではなく、ひたすら続けることが大事なのだと彼は言い切りました。

津波であれほど悲惨な目にあった漁師たちに「なぜ海に出続けるのか？」と聞いても、同じように不思議な顔をされて「漁師は海にでて稼ぐのが当たり前だ」と返されます。

彼らのこの「当たり前」の答えのなかに、厳しい三陸で生き抜き、再起を果たして来たたくましさの源があるのではないかと感じています。

神楽や信仰に込める願いには、彼らの強さと弱さが同居しています。「3.11」という大惨事の側面からだけではなく、彼らが先祖の時代から繰り返してきた生き方を、映画で捉えようと思いました。

監督・プロデューサー 遠藤 協

### ● 共同監督・プロデューサー 遠藤 協（えんどう かのう）

1980年生。茨城県出身。大学で日本民俗学や文化人類学を学んだあと、映画美学校ドキュメンタリーコースを修了。全国各地の民俗文化を取り上げたドキュメンタリー映画、テレビ番組、教育映像等の企画・演出に携わる。近作に「落合西光寺双盤念仏」「西久保観世音の鉦はり」（ともに地域映像コンクール奨励賞）、「むらのしばいごやー加子母明治座耐震改修工事の一年」（地方の時代映像祭優秀賞）など多数。



### ● 共同監督 大澤 未来（おおさわ みらい）

1981年生。東京都出身。日本大学芸術学部写真学科中退後、映画美学校ドキュメンタリーコースを修了。ドキュメンタリー映画、テレビ番組、記録映像、インスタレーション映像の演出、撮影等に携わる。代表作に「馬と人間」「帰郷—小川紳介と過ごした日々」などがある。



## ■ 映画『廻り神楽』スタッフ・製作情報

出演：黒森神楽保存会

語り：一城みゆ希

昔話朗読：森田美樹子（劇研麦の会）

共同監督・プロデューサー：遠藤 協

共同監督：大澤未来

構成：北村皆雄・遠藤協

撮影：明石太郎・戸谷健吾

ドローン撮影：古館裕三

撮影助手・スチル：井田裕基

照明：工藤和雄

録音・効果：齋藤恒夫

サウンドデザイン：森永泰弘

整音：飯森雅允

編集：田中藍子

制作デスク：山上亜紀・渡邊有子

題字デザイン：杉浦康平+新保韻香

宣伝美術：島田薫

エグゼクティブ・プロデューサー：三浦庸子・北村皆雄

製作：ヴィジュアルフォークロア



特別協力：黒森神社総代会、神田より子、岸昌一、櫛桁一則、金野侑、假屋雄一郎

機材協力：（株）小輝日文

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

支援：一般社団法人 全日本テレビ番組製作社連盟

## ■ 上映・配給に関する問い合わせ

「廻り神楽」製作委員会（担当：遠藤協）

〒160-0022東京都新宿区新宿1-12-12-3F ヴィジュアルフォークロア内

TEL:03-3352-2291 FAX:03-3352-2293

E-mail: kanouendo@gmail.com

公式サイト：https://www.mawarikagura.com/

## ■ SNSで最新情報配信中！@mawarikaguraをチェック！！

フェイスブック <https://www.facebook.com/mawarikagura/>

インスタグラム <https://www.instagram.com/mawarikagura/>

ツイッター <https://twitter.com/mawarikagura>